

この喜びを、一人でも多くの人に

世間は卒業シーズンを迎えている。
私どもの「学校」でも、半年の委託期間を終えた少年たちの卒業式ならぬ「お別れ会」を開く。

少年たちは、教会にやって来たころとは比べものにならないくらいたくましい。凜とした顔つきに、ピンと伸びた背筋。一人ひとり、彼らの顔を見つめていると、「教会家族」として共に過ごした半年間の思い出が浮かんでくる。

「おひつしへ、お願ひ、します…」
初めて教会の門をくぐった少年たちは皆、緊張しながら、か細い声であいさつをする。

少年たちの更生のために、何よりも大切に行っていることがある。それは、彼らに家庭の団欒を経験させ、家族の温もりを味わわせてやることだ。

そのために、とにかく初めは生活指導に徹する。朝起き、掃

除、あいさつ、食事……。彼らにとって、初体験となる共同生活。人と協力すること、たすけ合うことを学ばせる。

約1カ月が過ぎると、アルバイトを始める。社会で働く経験を通して、自分自身の適性を見いださせるのだ。委託期間中、少年たちが働く時間は午前6時

から午後8時まで、と定められている。しかし私は、午後6時以降は動かさないようにしている。

私たちは「教会家族」である。夕つとめを勤め、風呂に入り、皆で食卓を囲むことは、家族の温もりを感じる大切な時間だ。

委託終了後の進路について考え始めるのは、4カ月を過ぎたころから。彼らが希望する進路の中で最も多いのは、定時制・通信制高校への進学。次いで、土木・建設会社への就職など。

そんななか、卒業を間近に控えた少年たちの多くが「もっと教会にいたい」という。彼らは一日も早く更生したいという思いで頑張ってきた。しかし、共同生活を通して、地域の人たちも含め、大人たちの優しさにふれるうちに、教会を「自分の居場所」と思うようになるのだらう。

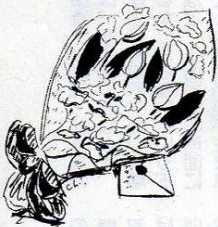
そんな彼らの変化を、私はとてもうれしく思う。それでも、彼らにこう伝える。

「ここは困っている人が来るところ。君たちと同世代の困っている人は、まだまだたくさんいるんだ」

先日、一人の少年がこんなことを言った。

「初めは、この教会のようなところがあるなんて思いもしなかった。自分が感じたこの喜びを、一人でも多くの人に味わってほしい」

彼の夢は、人のためになる仕事に就くことだという。



絵・ひやまちさと

非行少年と ともに

「補導委託」30年の歩み

大畑道雄

本導分教会長